

# 運命の二人―省三と紅子

深沢紅子野の花美術館は多くの支援者の方々の力で盛岡・中津川のほとりに誕生し、今年の9月には24年を迎えます。私はいつも野の花美術館は省三さん紅子さんにとって故郷のお宅であると思っております。そしてお二人の足跡を深く知るようになります。その思いは深まるばかりです。

お二人の生誕の場はごく近く、省三さんは明治32年3月24日盛岡市本町で、紅子さんは明治36年3月23日盛岡市内丸で生まれました。4歳の年の差で、お誕生日は一日違い、お誕生会はいつもご一緒でした。やがて省三さんは県立盛岡中学校から東京美術学校へ進学。『デッサンの深沢』と評判をとる画学生となります。紅子さんは幼い頃から画才を認められ、県立盛岡高等女学校を卒業し、東京女子美術学校へ進学。岡田三郎助氏に師事し、油絵の基礎を習得します。

省三さんは、在学中に30号の油彩「九月」で帝展初入選を果たし翌年も入選。三度目の出品作品を寝食を忘れて制作中に、食中毒を発症し意識不明で倒れてしまします。たまたま来訪した紅子さんに発見されて一命を取り留めました。聡明で美しい瞳の紅

子さんと、盛岡中学時代は野球部で辣腕投手として、捕手の久慈次郎さんと共に大活躍した、長身で筋骨逞しい省三さんは、たちまちにして恋に落ちます。最初の運命の出会いです。

ところが紅子さんは四戸家の一人娘で、二人の結婚は容易ではありません。周辺を説得した方は雑誌「赤い鳥」を主宰していた鈴木三重吉さんです。何とか丸くおさめて紅子さんのご両親と上機嫌で酒宴を張り、全員が破顔の写真が残っております。

やがて紅子さんは年子の二児の母となり、多忙で制作の時間も取れなくなり悩み、恩師の岡田先生に相談します。すると、一生筆を折ることなく励むようにと庭の花を切って手渡されます。さつそくその花をテーマに「台の上の花」と「花」を描き二科会に出品すると、初出品で2点共に初入選となり、一躍時の人となり、新聞紙上を賑わしました。

お二人は順調に作家活動をしておりましたが、やがて世の中は暗雲立ち込める時代となり、省三さんは従軍画家として蒙古に渡ります。活躍の場は広がり、省三さんは8年にも及ぶ滞在となり、敗戦を迎え、多くの作品を残したままやっとな帰国します。

故郷で紅子さんの迎えを受け、食料事情が悪いことから、一家で雫石へ入植。やがて教育者としての仕事が盛んになり盛岡へ戻ります。

お二人は『日曜図画教室』をはじめとする岩手の美術教育を次々に手がけるようになります。省三さんは岩手大学特設美術科の教授に就任します。省三さんの直截な指導、片や紅子さんのやさしく噛み砕くような指導は、生徒たちの人気も高く評価も上がったのですが、紅子さんは喘息が悪化したため、一人で東京へ戻ります。やがて省三さんは定年のため大学を退官すると紅子さんのもとに戻り、悠々自適の制作三昧の人生になります。

お二人は多くの旅をし、絵を描く姿は幸せそのものでしたが、省三さんは山中湖の別荘で肺炎となり、ご家族に看取られながら、平成4年3月24日、93歳で永眠。紅子さんは、省三一人を残しては逝けない、の言葉通りに、翌年の3月24日、90歳で同じ山中湖の別荘で就寝中に永眠。お二人の絵描き人生70年の運命の幕は下ろされました。野の花美術館は、深沢家のように心安らぐ空間でありたいと願っております。



深沢紅子野の花美術館館長

ひろしま やすこ  
広嶋 康子